早大講義　経済学

早稲田大学図書館

特別
ヌ6
9291
7

早稲田大學圖書

早大講義

經濟學

ス6
9291
7

早稲田大學圖書館

八水田印行

<97-217>

原初的マルクス主義が公式的に一切の社会運動の運動と学説の據り所となっている。何というふ創意性の缺けたことだろう。我々は生活の必要から理論を要求する。マルクス主義の批判的検討は共産党員だって必要なことなのである。

　しかし生命の一部もしくはその集中であるごとき理論はそんなに容易にできあかるものでない。又人の思考作用は従来慣熟してきた諸欲念を媒介とするから一時にその影響を脱

承諾した。私が呼び出されて行つてをると河上が入つてきてにこ〳〵して話しかけた。こちらは独居拘禁で一日中無言の行をしているのだから私も大いになつかしさを以て、健康に変りありませんか、大事にして下さいなどと話した。話が個せんに転向のことになつたのはもちろんである。私は自分の立場をできるだけ詳しく説明した。かれがマルクス主義をまだ信奉しているかどうか知らぬが、かれの獄中の行為はあまり毅然とはしてをらず、

経営と社会
―経営学の社会学的構造―

第一章 学問

一、直観的知識と論理的知識
二、学問の属性。 三、虚偽の学問
~~学問と現実~~
四、学問の自由と有用性。 学問と学術者
五、学問の分類

第一章 学問

一 直観的知識と論理的知識

一、人間の知識には直観的知識と論理的知識がある。
知識は人間特有のものである。知識はいかにして生れるか。
~~人間はいかにして知識をもつか。~~
人間は生の本能をもっている。この本能にうごかされて行動し且つ生に有用なる事物を創造する。人間は客体（自然・他人）なしに存在しえない。しかし客体から支配されるだけの被動的な存在ではない。根源的なものは自己内部の生の本能で、その発動と価値創造とは客体を媒介とする。知より行が先きにある。行動によって主観と客観との統一、即ち自己と外界が統一なものとなる。

河上が「世界文化」に書いている私との獄中会見談というのには私が河上に会見を申込んだようになっていたが、その逆である。当時私は独居拘禁だったが河上は入獄早々、教務の雑役となり又独歩というのになった。雑役とは事務係りのようなもの、独歩とは看守がつかわりに刑務所構内のどこにでも行けるもので、普通の囚人は長いこと勤勉につとめた揚句にそれにしてもらえる。独歩というのは千人ほどの囚人のうちに三十人くらいしかない。雑役も独歩も非常な特権的地位だが、河上は年をとっているとか学者だとかいうのでそれにしてもらえたのだろう。もしくは謀略のために役人がそうしたのだろう。雑役になれば毎日役人に接触するわけで、河上は当時の所長に一週一回くらい所長室で話しこんでいたそうだ。ある時、所長が看守を通じて私に、河上が面会したいと言っているが逢ふかと問ひ合せてきた。私は当時河上に好意こそもってをれ、何の悪意もなかったから喜んで

直観的知識は人間が行動のなかで、個々物について、感覚を通じて獲得する最初の、新鮮な、そして決して仮相でないところの直接的知識である。それは主観が客観を支配しようとする最初の勇敢な行動の結実であり、又他面からいへば、今まで自己の知らなかったところの、又自己の力の及び難いほどの深さや（時間的）広がりをもつところの客観から与へられた主観の訓練でもある。

論理的知識は、知性を通じて直観的知識を整理し、個々物相互間の関係を明かにするところの抽象的知識である。学問といはれるのはこの論理的知識である。

二、直観的知識と論理的知識とは別々のものではなく、後者は前者の上に成立する。学問は乾からびた、生から遊離した、抽象の亡霊でない。真の学問にそれは血の出るような現実性のあるのは、行のなかから直接に生長する直観的知識の綜合であり整理であるからである。

知と行との関りあうなかの統一を保障するのが学問である。現実から素材をとり、現実の動きの基本的モメントを発見し、現実を実験する道具となるのが学問である。学問は直観的知識と遊離するときその性格を失ふ。

論理的知識はいかなる点で直観的知識と異るか。[illegible]は

147

ている。岩波は有名の人物だったが、どこか
く商人である。河上は商人からも軽蔑された
。しかし河上はこんなことに不思議に心の痛
みを覚えぬ人だったらしい。自己反省などの
あった人ではない。河上が京大を追はれたと
きに当時市谷の獄中にいた私に手紙をよこし
たことがあるが、その中には、京大の教授に
は自分の教へるや教養のある人もあるのだが
、その人たちは一人として自分を支持してく
れなかった、人心の変はまことに悲しいもの
の

148

だという意味を書いてあった。私はその手紙
を読んで彼の境地に同情はしたが同様に
自己反省のない男だと思った。大学
教授は意久地なしにきまっているにせよ、一
人くらいは支持しそうなものなのに、それがな
かったのはつまり人徳がなかったからのこと
で、河上はなぜ自分は人徳がないかと反省し
てみるべきだったのだ。かれ一人だけがプロ
レタリア教授で、他の京大教授はみなブルジ
ョアの手先だったというわけにはゆくまい。

主として感覚を媒介とするが、若者は論理的知性を媒介とする。因果の欲求は人間を歴史的生物たらしめた動力の一つであるが、それは歴史の過程のなかで精錬され、拡大され、知性という新しい力を人間に附与した。一切を主観の霧で蔽ふことがやみ、自然だけでなく、人間自身をも、人間の作り出した歴史の歩みをも、客体化して眺める客観的精神が生れた。それは主観の力を弱めるものではなく却て強めるものであった。自然と人間、人間と人間、事物と事物、それらの相互関係を貫く必然的なものや、それらの交互作用による発展の法則などが論理的知識によって明かにされるに至った。これは人間の生をより豊かにするものであった。人間の追求する理想を放縦な空想に終らせず、又現実をただ自然必然的なものに終らせず、理想と現実の結合点を発見するのは学問である。学問だけで人間が進歩したのではないが、それが歴史の重要な動力の一つであったのは疑ひない。

二、学問の属性

属性（アットリビュート）とは、物がそれなしには考へ得ない如き性質即ち其物の本質をなす性質を指す言葉である。学問の属性には次のことがある。

を人格的に尊敬していなかつたし、そのマルクス主義の教養に至つては浅いもので、紹介業者の範囲を出でないから、それはなほさら尊敬していなかつた。獄中でよぼ〱と歩き、ぼやけた顔の中に狡猾と臆病の入りまじつた複雑な目つきをしていた彼を思ひ出す。彼は一審の五年の判決に不服で控訴していたが、もし控訴で五年以上になると恩給が貰へなくなるからといふので、急に控訴をとり下げて下獄した男である。恩給は五年以上の刑にな

ると貰へなくなるそうで、一審の判決はちやんとその手べんをしてくれていたわけだが、主家に弓をひいておいて、その主家から恩給は死ぬまで貰ふといふ態度は卑劣だとおもふ。かような卑劣さは岩波文庫で出た資本論の翻訳をすぐ又改造社に売りつけて原稿料の二重とりをしたことにも現れている。マルクスを錢の種にするばかりか原稿料二重とりの道具に使つている。ある時岩波茂雄が河上の人格の高潔を卑しみきつて私に話したことを覚え

第一、事物の根本的知識であること。即ち本質についての知識である。本質が流出して現象となる。本質は現象以外に求められない。現象の外に何か別の存在としての本質を仮定するのは形而上学的空想である。しかし現象には非本質的な仮象があり、又現象は生滅する。一切の事物は生成する。一切の事物は関係し合ひつつ、それ自身をも、全体をも、生成させてゆく。この生成をもたらす事物の内的力や、その相互関係における基本的なものが本質である。学問する者は最も鋭く本質を思索せねばならぬ。かくして獲得された概念は、単なる抽象でなく、内面に生の力をたたえた、現実把握の武器である。

第二、体系化された知識であること。（化された法則）体系化とは単純化である。単純化は因果の連鎖を明かにすることである。これによって、現象間の統一、相互依存、全体性に関する表象が生れる。これが法則である。人間の直観や知性は絶対的でないから、その表象は不完全ならざるをえないが、法則とは人間の世界の観察、行動、知識の綜合であり、それを通じて世界の本質が断片的に表現される。現象は常に流動し生成するのであるから、法則も内的変化をせねばならぬ。この流動し生成する過程を原因及び結果に単純化するのは可能な如くであり、絶えず発展しつつある世界を一定瞬間の静止状態に於いて捕へ之を普遍的形式に

（学問は世界の直観的知識を整理し、その相互関係を概念の形で系化するわけであるが、更に体系化するのである。）

つたりして面白いところがあつた。左翼囚人が頭もよく流動好きで機敏でありつつ人間的にとつこが不足なところがあつたのに反して、右翼囚人は頭は石みたいに鈍重だが禅か何かで肚を据えているところがあつた。右翼囚人はたいてい労働嫌ひであつた。普通囚人ははるかに左翼囚人を好み、右翼囚人の非庶民的な態度に反感をもつていた。ほんとうの人間的修養ができていたわけでないからだらう。右翼囚人にはやたらに恩赦があつて、無期の者も五年か六年で出てしまつたが、左翼囚人には恩赦はいつも素通りで、二千六百年祭といふときに一度だけ遠々普通囚人なみの減刑をしただけであつた。左翼囚人のなかから右翼囚人に臣僕的態度をとる者が一二人出た。

河上肇がその自叙伝のなかで私をこきおろしているそうである。わざわざ買つてよむほどのこともないから、まだみていないが、日共産党機関雑誌の「世界評論」にその抜萃らしいものを讀んだことがある。私はもとから河上

おいて示すのが法則的知識である。自然現象に関する自然法則と、人間社会に関する歴史法則とに差異のあることは勿論である。

第三、一定の方法論を以て獲得された知識であること。学問の方法に帰納と演繹がある。いずれか一方のみが学問的方法だといふことはできないが、順序よりすれば帰納の方が先きである。しかし方法論とはこんなことだけをいふのではない。学問は、雑多性で無秩序に流動している現象の根本に横はる統一的なもの即ち法則を発見する任務をもつが、これを発見するために、一つの據点に立つ、即ち一つの基本前提をとつて、それをテコとして統一することが、據

事實上行はれるのであり、それを意識的に行ふほど、学問の深さや鋭さが増す。自然科学はしばらく措き、社会科学の領域においては観念論的方法、唯物論的方法、生物学的方法に大別せます。精神現象の全体的把握にわかれ、精神を重くみるもの、経済を重くみるもの、政治を重くみるもの、文化を重くみるものなどの[illegible]があり、それらは更に哲学的に観念論、唯物論、生物学のいずれかの立場に帰属する。学者は発見した真理を公表するのみならず、如何にしてそれを発見したかを公表せねばならぬ。

ちを刺戟した。
五一五、血盟団、二二六事件などの右翼囚人もここに集められていた。民間志士と称する井上亀川などは知性のない野卑なゴロツキとしか思はれなかった。こういふハッタリ連中が軍部と結合して終戦前の日本政府を動かしていたといふのだから国民は気の毒なものであった。軍人の囚人には毛色の変った者が多かった。かれらの思想は封建的だったが人間的には人情味があったり東洋的修養があ

しろは一定の威厳を失はず、又仕事ではいつも能率を上げた。野狐禅に凝って増上慢となり頭の変になる者、法螺を吹いて普通の囚人を煙に捲く者、役人に取り入って楽をしようとする者などもあったが、これは人外境だからやむをえなかったかもしれない。私や鍋山君や風見君やその他の約人は堅実に精神的結束をしてそれの道を歩いた。国内及び国際の形勢は此頃になると一そう目まぐるしく変動して、人一倍政治的意味の強い右翼囚人た

第四、客観的知識であること。先づ客観的な判断が出来るの
分析、純粋と実験で行ひ、論理化し、論理を批判し、結論に批判する。
批判即ち価値判断は学問的ではないとする。過去においても現在でも
如何なる学問の対象も、未来においても実在するかは過去及び現在を研究して
つてからのことである。マックス・ウェーバー（「社会科学的及び社会政策的認識の客観性」
一九〇四年）は経験科学における没価値的研究ということを唱へた。
経験科学は何を為しうるかを教へても何をなすべきかを教へ
ない。経験科学の範囲外の価値判断は、哲学的思弁によつて
上る。しかし一流の学者は学問上の主張に宗教を持ち出さない。

最初から価値判断を捨て去ることは、現代人が政治的市に沈黙あり
する考へ方に復帰することとなる。
第五、~~批判精神~~学問は批判を学問が尊ぶこと。
第六、有用　第七、自由

三、虚偽の学問

~~Dilettant~~
Dilettant

(1) 知識のための知識。直観的知識と切りはなされた概念の亡霊。
~~(2)~~ 現実的関心を失った学問。ディレッタント。現実の路から離れた娯楽。
慰みのための慰め、それ自体。
(2) ~~(3)~~ 余りにも観念。価値判断でもつてこんだ知識。
(3) ~~(4)~~ 古い公式にこだわり、現実、生成、創造を忘れた知識。

し、いかに人を愛していようとも一定の距離を保って自己の個性を発揮し、不意打の出来事にもたじろがず、頭を上げて人生の道を歩きたい。自己を甘かしたり、自惚れたり、自己を卑小の者と認定する自失的な奴隷の精神を排する。しかしそのためには自愛との絶えざる闘ひが必要となる。自愛が唯物的であるに反し、大なる地上愛、人の為になること、生死の覚悟、名聞の嫌悪、苦痛の歓迎、克己等はなにが非唯物的なものであり、又非唯物

的努力を要求するのである。

六、同獄の人々

一しきり百人ほどもいた左翼の囚人は仮釈放になったり満期出獄したりして昭和十五年のはじめになると二十人足らずとなった。党の幹部だった者とかギャング事件参加者とか短刀で巡査を殺したとかピストルで官憲と討抗したとか、かなり重刑の者が残った。左翼出の者は何といっても積極性があるから、盛に読書してここでも議論しあひ、役人にたい

~~(4) 科~~ 雑然たる断片知識の学科
(5) ~~科~~ 体系的学問

四、学問の自由と有用性。学問と芸術

一、自由とは自己内部の能自性を最大限に発揮することである。諸能性を与えられた人間は、自己の能自性と共に他人の能自性をも尊重する義務がある。自由は社会的責任以外のいかなる障害をものりこえて前進するものであり、既に大なる前進をしてきている。特に精神文化――学問、芸術、宗教等――は何物にもまして自由を要求する。教権や政権から拘束された知識は人生を改造する具とはなりえない。(いつの学問芸術。)自由に思索された知識が真の知識である。政権は一時し思想の自由を縛った。~~封建体制~~ しかし法律や制度や国家や民族から常に弾圧されながらに学問はそれらの障害に拘束されずに発展しつづけてきた。ヴィコは人類は神の時代、英雄の時代、人間の時代の三階段を経過すると言った。人間学問は神や英雄の道具となった。それは人間自身を解放するものでなければならぬ。

二、概念の遊戯は真の学問ではない。生を豊かにするためにのみ

な毀誉褒貶に動かされずに極端のまま子をも日常茶飯事の如く取り扱ひたいといふ心構へはできている。しかし自己内部に巣食ふ名聞の心を退治しなければ自分の個性の発展はあつたものではない。私のように罪業感に心を燒かれたり、いつも何物かを憧憬せずにをられない人間にとつて名聞の心を断つことは非常に苦しい思ひのすることである。しかしそれをしなければ非生産的な自愛から離れることはできない。私はその決心をしてから心が軽

くなつた。いかにこれまで名聞の心が窒苦しく私を壓していたかがわかる。私は自分の姿をも他人の姿をもかなり自分の心に映すことができ、又他人にたいして同情を以て向ふことができるようになつた。

自愛との斗争は獄中の私の中心問題であつた。それはそこで終つていない。一生つづくことである。自己超克は宗教的な自虐や人間價値の極小化の企てではない。私は生の渇望を肯定し、本能のめでたさを讃へ、虚飾を排

真の学問がある。それは有閑階級と離れるものではない。学問は人類共同の財産であるから超国家的、超民族的性格をもつが、人間の生はまづ国家や民族の中に花咲くものであり、豊かな生を豊かにすると共に先づ国家や民族の枠内で以て営まれる社会生活を豊富にするにある。それに有用でない知識は真の学問でない。

三、社会は勤労体系である。生産組織体である。勤労には精神的勤労と肉体的勤労が（両者は本来不可分なものであるが）あり、肉体的勤労の方が広汎な基体である。精神的勤労に従事する者の知識は現実と遊離しがちであった。肉体労働に従事する者は階級的隷従、搾取のために無知に放置されていたが、僅かな学者と人間的勤労は肉体的労働をする者に残された。今日の根本問題は肉体労働と学問を結合することにある。その時、精神的労働の片面性も克服されるであろう。それは体得の如くである。

「また二つのもののみが、日に日に新たの全生命のあらゆる領域に於いて、それ全面的発展のなかにあって偉大さを失はなかった。創造的かくれた優秀の中にあって形成された生活が全能力を獲得しえた。これ即ち民衆と学問、学問と労働者である」

「学問と労働者との同盟、この社会の両極の同盟、この両者が相抱くならば、あらゆる文化の障碍物をその鉄腕の間に粉砕するに違ひない」（学問と労働者）

まい。しかし名聞の心の俘になっている自分を見出して憮然とした。自分は人から悪口雑言されることには実際平気になっている。たいてい私よりも更に値打のない連中ばかりだからである。常に敵から取り巻かれていることは、私の個性の発展にとってむしろ歓迎すべきことで、自己の力で自己の価値を証明する機会はそれだけ多くなる。私は実力的存在を尊敬する。こけおどしの伝統の力や、名誉を持つ徒党の力などは尊敬しない。泡みたい

しかるに人なり物なり外界のものを自己の掌中に握った瞬間から、その握られた者が、こんどは握っているその人間の物慾を一そうそそりたてて、けっきょく彼を掌握するに至る。握ったと思うものから今度は自分が握られる。所有が所有者を縛する。所有欲には財物のそれと名聞のそれとがある。名聞の心は財物への貪慾よりも一そう害がある。私は単純な生活を愛し財物への慾は若い時から軽蔑してきた。それからもそれに動かされることはある

五、学問の分類

一、
学問は次の如く分類できる。
1、先験科学（形式科学）（数学）——論理学——[illegible]
2、経験科学（実証科学）——（自然科学）——人文科学（精神科学）[illegible]
a 自然科学（物理学、生物学、生理学、人類学、化学、地質学、気象学其他）（説明之）
b、歴史 精神科学（精神科学）——[illegible]
a' 人文科学——哲学、倫理学、心理学、論理学。
史学、宗教学、史学、人文地理学、美学、言語学。
b' 社会科学——法学、政治学、経済学、
社会学、教育学

二、
学問は法則の発見を目的とする。自然科学の発見する自然法則と歴史科学の発見する歴史法則とは性格的相異がある。
1、自然法則＝＝反覆的——標識的——必然的——人間意志ノ介入ナシ
2、歴史法則＝＝対象としての人間集団——一回起的——生命——
意欲——人間意志の介在——法則自身の発展

三、
歴史科学は特有の方法をも有せねばならぬ。

とは深い関係がある。単に観念的に生死を思考の外におくのは其の解決でない。精神的に態度が死して蘇ることも大切だがそれ丈けではまだ観念の業である。肉体的な生を愛し死を嫌ふのは人間の本能だ。この本能に即し、肉体的生を愛しつつも、自愛を断つために、即ち人の為になるために、いつでも肉体の有限性に左様ならを言ふ覚悟がいる。社会主義は生やさしいことでない。

自愛は他を所有せんと欲する衝動である。

る。華厳の四誓願のなかに「大慈悲心を起して人の為になるべき事」といふ一項がある。これによつて本能は精神にまで高まることができる。真の自由は自愛の克服からはじまる。敵に克つとは先づ己れに克つことである。それは人のため、世のため、社会のために身を捧げることと離れない。平凡な結論かもしれない。しかし私の社会主義への信念にはこうしたものが含まれる。

ここには又生死の問題がある。肉体と自愛

(1) 自然科学から資料の蒐集、實験、史実を記録、心理的因果法
則の発見、客観性を与える。しかし対象が違うのでおのずから自然科学
的方法そのままではいけない。（自然科学的方法の一部導入
(2) (1)' 客観化 ― 主観をさけて眺める ―
(2)' 内化験 ― 現在の直観表象 ―
(3) 発展の追跡 ― 発展系列 ― 縦断的 ―
(4) 要因 ― 地理的、歴史的、文化 ― の交錯 ― 身体的、心理的
(5) 人間的とは社会的、歴史的存在であると同時に ― 生理的存在
(6) 人間性の研究には自然科学（心理学、生理学）を前提とするが
これは単に理解の手掛りにすぎぬ。自然から振り返って自己

自分の内部の意味、目的、価値を捉える

哲学の参考書
マックス、ウエーバー「社会科学的及び社会政策的認識の客観性」
ピアソン「科学概論」
ディルタイ「歴史的理性批判」（邦訳ディルタイ著作集 [illegible]）
フロサル「学問と芸術家」
タイエー「美学」

とができる。
単なる自己苦責は意味がない。自愛を去ることは、新たに地上愛にめざめて、他のために働くことである。佛教に願（がん）という思想があるが、これはよい思想である。衆生が苦悩から脱しないかぎり、自分一人の成道を楽しむことをしないというのである。プラトンの国家篇では天上にのぼった哲人が再び地上に下って洞窟の暗がりのなかに、つながれている同胞の為に名誉と労苦を共にするという思想があ

るかもしれない。自愛と生の本能とはただちに同一ではない。自愛は生の本能の悪しき表現であり、人間を生成から疎隔し発展を後退させる。善は最も自然に成立すると共に最も陶冶せられたものでなければならぬ。激しい自覚と訓練を経た善が価値がある。自愛との斗争が絶対的問題となる。自愛への執着を断つ勇者が自己超克者である。自己超克は自己の意志力の否定でない。いな強大な意志力のみが自己内部の価値なき自然性を駆逐するこ

第二章　社会科学に於ける経済学の地位

一、社会現象と社会科学

二、経済現象の学問的認識としての経済学

三、経済学の分科

四、経済学の方法

一、社会現象と社会科学

一、社会科学は社会現象を対象とし其の根柢にある法則の発見に努力する。

二、社会現象は四つの部分に分けて研究さるべきである。

第一、本質

(a)人間の相互関係（協力、雑居・接近・競争支配）（争闘）

(b)物質的基礎と心意力

(c)発展

(d)業績

第二、社会構造の研究

(a)家族（男女関係）

(b)階級

(c)職能体系

い。自他のなかに棲む。一の限定は他の限定と相依據する。すべての自己は相依り相生かされている。人間の自然に対する関係においてもそうだが、人間相互の関係すなはち社会において特に自と他とはそれらすべてを含んだ大きな全体のなかにある。人間が自然の力を有利に導くために森林を造り川に工事を施すように、人間自身の自然を自覚的に制御したり正しく導くことはできる。人間の生成は宇宙的生成と合致しおそらくその中心であ

る揺といふ意味をもたない。自愛にもとづいて利己、怠惰、臆病、虚言、嫉妬、羨望、金銭狂などの悪徳体系ができあがる。自愛は生の本能に根ざしているから、本能のなくならないかぎり、それもなくならない。しかしそれは粗野な自然性であり、他人を利用して勝利を占めようとする盲目的衝動のもとに実は自己をもほろぼす。仔細にみれば単一で孤独な自己なるものはない。自己とは一の限定された生命であるが、根本生命自身には自他はな

(ハ)経済ヲ主トシ
(ニ)政治ヲ主トシ（政府・国際・法律・
(ホ)風俗習慣
(ヘ)文化ヲ主トシ（教育）

第三、発展動力の研究（原因トシノ内部的自発性）
(a)本能・家族的欲望・業績ヘノ愛・
(b)生産力（自然ト人間・人間相互ノ関係）
(c)政治的支配力（人間相互・民族相互間）
(d)文化

第四、発展法則の研究
(a)[illegible]ノ弁証法
(b)発展段階

(ロ)価値判断ヲナサズ経験的ニ考察スル

三、社会科学の基本科学としての社会学
(1)社会的諸現象の研究は人類学的研究に始まる。
(1)コントに始まる。 実証の段階 — 神学的、形而上学、実証学的。 把握（動力[illegible]）

コムトー — 社会静学 [illegible] — 社会動学 [illegible] [illegible]

(2)総合社会学 — 歴史哲学を脱せず — 広汎に過ぐ
(3)形式社会学 — ジンメル — 形式や関係ヲ研究ス — 関係 — 人間相互の
(4)意的関係の究明 — 精神相互作用の一形式たる相互関係（心理的） —
(5)関係 — ジンメル — 結合及分離 — ヴィーゼ — 結合、分離、混合 —
テンニース — 協同社会、利益社会 — ゲマインシャフト — 共同、集団、結合的関係 —
フィアカント — 普通関係ト生活共同関係、感情共同関係、目的共同関係 — 集合関係
— 従属関係、権力関係ノ権力及支配関係

間は宇宙生命の一部たることからみれば無限である。無限は人間にとつて超越でなくて内在である。有限の人間は無限の限定たる意味がなければならぬ。このめでたき生の本能を最大限に発揚することができればできるほど人間の生活は美しくなる。しかしこの本能が反生成として、悪として作用する場合がある。それが自愛だ。

自愛の持続は人間の宿命である約束を破ることにある。エゴイストは個性の愛の鈍磨、他者への置き放し、生活の粗雑化ということがおこりやすい。これは宗教に伴ふ陥穽である。絶対者への接近はむしろ地上生活の充実を通じて得られるのではないか。

人間の生の本能は宇宙生命の一部で、それ自身めでたき、喜ばしきものである。生命の原理は滅亡でなくて、生長、発展、戦闘、向上、均斉である。矛盾や無常は生成に伴ふ影にすぎない。生成が一切の事物の内在目的だ。

善とは生成であり、悪とは反生成である。人

(5) 常に社会学の如き形式社会学の網羅

(6) 社会学はまだ十分発達していない。しかしすべての社会科学の基本原理たりうる学問は示さすべきであり、現存の社会学に絶対信頼できる説たる基本原理と見なすものはある。

四、社会現象の特色

(1) 自然的なもの、不合理的なものから、自覚的なもの、合理的なものへ、

(2) 複雑で、突発的で、変動的

(3) 人間心意が基本になっているが、一応の客観性をもって人間に臨む。外力的に作用する。これを意識的に統制しうるようにすること

が一定である。

(4) 大きく政治、経済、文化の三現象に分けられる。相互に影響する。

(5) 連続的に発展する。一の社会より他の社会へ次第に特化する。連続を中断しないところに進歩が保障せられる。蓄積。

(6) 業績に参加する者の量が増加するところに近代文明の特色がある。

労働者階級と学問との結合にまで進まねばならぬ。

であらう。とにかく不愉快な代物ともであつた。

　しかしひとのことはどうでもよい。なによりも私自身のことである。端的にいへば私は人性の根本悪を自愛に見出した。佛教ではこれを煩悩といひ、これを断つことを教へる。神との直接的接近によつて人間を自然性から解放し生活の價値を高めるといふ理屈は分るが、人間の道徳生活が神からの恩寵を通じてでなければ与へられぬとする思想には、地上へ

中からの攻撃は泣言としか受取れなかつた。佐野学の轉向はまちがつているが自分の轉向は正しいのだと主張する福本一夫の生れつきの図々しさなどは滑稽であつた。かれらは已れの真実の姿をたゞ一人直接に自分自身で眺める勇氣がなく、他人を非難することによつて自分を押しまそうとしたら、他人を通じて己れを眺めたり持ち上げたりする憶病者で、ニイチエが、他人の身体のなかに坑をほつて身をかくす蛆虫と罵つたのはこの手合のこと

二、経済現象の学問的認識としての経済学

一、経済学は社会科学の一部で、社会現象のなかの経済現象を対象とする。

二、経済現象は次の事から来る

(1) 経済現象ハ先ヅ人間ト自然トノ関係デアル。労働ガ人間ト自然ヲ媒介スル。人間は生物として存続しうるために、自然の素材に労働を投入して生活物資を獲得しなければならぬ。ここに経済の第一歩がある。これは人間が肉体的存在である以上、いつまでたっても第一歩的必要である。しかし人間はその広汎な欲望を充たすために、様々な生活資料を豊富に求め、これが文化の基礎条件の一となる。この富の生産は高度化され（目的化され）た経済である。かくて経済は先づ人間と自然との交互作用である。

(2) 経済現象ハ人ト人トノ関係デアル。富は自然に（事物）対して人間が技術を以て意識的変更を加へる（生産一方デアル。）変更は組織を以て行はれる。又かくして生産された富を分配し交換することも組織を以て行はれる。この組織を経済組織と呼ぶ。組織であるが故に人間対人間の関係である。経済とは富によつて媒介された（非人間的相互の）組織的関係である。純粋な個人経済は最初から存在しない。人間は最初から組織のなかで生活した。今日の組織的社会も一環としてのみ成り立つ。而して組織は常に自然発生的なものであった。（業等の拡大の割合である。）非合理から合理化された経済へ、それは人間意識の目的的な組織化 [illegible]

(3) 唯物史観は経済的他の一切の社会現象の基盤であり起動力であり、それが政治や文化もそれぞれ従属的役割をする。多元的社会学説

る人々の型を見た。私は別に喜悦、快活、勇気、正直、大胆、親切、寛大、希望、献身などの人性の肯定面をも眺めたが、それにくらべると上記の否定面からの印象の方が鋭かつた。

私たちが祖国への帰向を声明したとき無節操漢として多くの冷嘲熱罵を浴びた。共産党に居残つたソ連中心主義者が私を呪ふのはその愚憫むべきもその立場からは当然であらう。当時の世上のリベラリスト連中やシムパ連

私は共産主義運動の渦中で国中国外の数百人の人と直接につき合つたが、よく考へてみると、人格高潔の士はロシア及び中国の人に僅かばかり見たばかりだ。人性の多くの喜ぶべからざる側面をみたことの方が多い。それは私自身を含めてのことである。権力欲、巧言令色、小技巧、憎悪と嫉妬、残忍なる裏切、背恩、大なる事業に逢へば忽ち絶望してニヒリストとなる小胆者、酒に性根を忘れる者、金銭女色的悪徳など色々の弱点に敗北す

が正しい。しかし経済が政治や文化に大きい関係をもつのは明かである。(範囲的に異っているの)

(4)経済は生産、分配、交換、消費に分かれる~~非経済関係がある~~が
ではない。これらのものが組み合はされて経済組織が成立する。
経済は時代によって異った形式をとる。

(5)人間社会は未開から文明へ、野蛮から文明へ、自給経済から分化経済へ、閉鎖的から開放的へ等々の発展をする。歴史的事実として、社会に一定の発展段階のあることが認められる。家族共同生活、古代奴隷国家、中世封建国家、

(6)近代資本主義国家の段階を有す。(次第に社会主義段階がくる。)経済現象も之れぞれの段階で異った形態をとるのである。故にこれぞれの段階は之れぞれの経済学をもつ。名士からの経済現象を綜括に組織する如き

経済学は余りに抽象にすぎ、具体的な現実分析の学たることを忘るる傾向がある。我々が今日経済学といっているのは資本主義経済に関する学問である。

三、経済学

(1)社会科学である。——すでにのべた社会科学の研究の研究基準に従ふ。

(2)資本主義段階の原則を採用する

(イ)私有財産　(ロ)商品生産　(ハ)交換
(ニ)階級制度　(ホ)所得
(ヘ)資本主義制度の経済組織下の国家
(ト)世界市場
(チ)帝国——恐慌、失業
(リ)現代への発展

(3)経済学ノ重点——分配 ↓ 生産 ↓ 價値論 ↓ 資本

の近代人や都会人が私の心のなかでひしめくのを感じた。私は弱虫を軽蔑した。弱虫だけが懐疑し、ペシミストになり、やけをおこし、感傷的な涙を流し、迷信家に堕落する。強者は北極の氷の冷酷、高山の頂から地上に下る電雷の力、古武士の鉄のような克己と訓錬を以ていかなる逆境にも人間の生を貫く。私はこうした強者たらんと欲して、しかも現実にはしばしば空約な誓言に終り、私自身一個の弱虫になる瞬間があった。

ふ偏狭、目的のために手段を択ばざる謀略主義等の数々の欠陥に落ちた。

　酒色の渦中では生の憧憬は一そう激烈となる。行為慾、事業慾の衝動に身肉えして血走る眼になることもある。それは私を笑ひの少い、怒り易い人間にした。

　私は観念の上で、またある程度は感情を以て、知に禍されて何物をも単純に信じ得なくなった近代人や、田舎の心を失ってしまった都会人を軽蔑してきるが、しかも時としてそ

(3) 資本主義にも資本家や経営者あり、それぞれの法則の発見（自己資本・独占・経済発展）

(4) 価値判断をいれてならぬ

(5) 経済学は人間に関する科学である。人間の生活目的は幸福にある。

幸福とは単に富の増加を意味しない。人間が全体として完成し、発展することが幸福である。（経済学が）富を媒介として人間の幸福を探求するといふても、それは価値判断をもち込んだことにならない。現代の経済学の基本問題の一は社会問題の解決にある。
国家の協同主義の形態を発見するにある。

三、経済学の分科

一、次の分科がある

1、経済原論 — 法則的説明 — 生産論 — 分配論 — 消費論 —

2、経済史 — 一定の発展段階の特有法則 — 発展段階への連続 — 一般歴史との関連 —

3、経済学史 — 各時代の経済現象の理論的把握 — アダムスミス以下 — スミス —

4、経済政策 — 政治との接触 — 政策 — 価値判断を入れる — 工業政策、農業政策、交通政策、貿易政策、

5、財政学 — 国家の集中的表現としての財政 — 自由財政 — 計画経済時代

6、経済地理学 —

7、経営経済学 —

勇気を要することであつた。
　単純であつた少年の日を思ひおこして感傷に打たれる日もあつた。人生の門口に立つた頃の私は正直な人間であり、創意力も勇気も相当にあり、実行を愛するたちでもあつた。名誉を重んずる精神・誠意、人に対する親切も缺けていなかつた。しかし若年の頃から共産主義運動に身を投じ、牢獄や亡命の生活を重ねてゆくうちに我侭、功名心、気まぐれ、人を容易に信ぜずそれを敵と味方に分けてしま

119

切らずに過去の運動から立ち去つたのは何といつても道徳的無責任である。私には底の底まで考へ抜いたり悩んだりしないで妥協的に其日暮しをすることはできない。(そんな釈何者が多かつた。)自分は祖国と民族へ還つたのだといふ喜びは心を明るくするが、それだけではまだ自分の行く道を突きつめたことにならない。道徳の問題が切実に心に迫つてくるのであつた。この寂寥、孤独、怒り、不安のなかに独自に自己自身の姿を眺めるのは

四、経済学の方法

一、帰納と演繹 ― 帰納―個々の経済現象における共通要素の抽出―演繹―公理よりの演繹

― 歴史派・オーストリー派の争論 ― 綜合にすゝむ

二、歴史的性格を強調する方法論 ― 一回生起的 ― 個性記述的 ― 自然法則的
新カント派による
思索を排す ― 新カント派 ― 文化価値 ― 普遍化的方法を排す ―

三、経済現象は歴史的発展であるから歴史法則的に捕へられねばならぬ

四、経済現象は自然から制限される面がある。又、個々の人間意志から独立して客観物として作用する面がある。これを必然的過程に於て捕へることは政治現象や文化現象よりは容易である。自然科学

五、自己超克

私は読書だけで暮していたわけでない。自己超克こそ私の小菅獄中の最大の課題だつた。自己超克は平静の生活の人にはなか〳〵ありえない。私は心に多くの苦悩と憂愁をもつたため、この精神的戦ひに巻きこまれた。苦悩と憂愁はむしろ恩寵であつた。命をかけた運動は又祖国的な誤謬のものであつた。有象無象の雑言罵詈は私にとつて物の数でない。そんなものは私を強めるだけだ。しかし腹も

生肯定、それ〳〵の性格を具へた悪党の群がちやんとあるのを見て今更黙阿彌がね的な大作家であるのを感じたりした。長い間に何々ピストル強盗、何々説教強盗などといはれる連中に伍して人性についての色々な勉強をした。

獄は人を孤独にする。ここには世間的自由はない。絶対的不自由であり強制である。ここは人生の地獄である。しかし獄は決して人を厭世主義者たらしめる所ではない。かよう

的な法則、機械論、法則、偶然と必然の相互関係、運動ーにおいて捕へられて居るのである。
(自然科学的手法のみに信頼しすぎるのが欠点である。)

五、唯物史観は経済といふ要因のみによつて一切の歴史現象を説明する。しかし政治や文化も一定の能動的要因として働く。多元的統一、相互作用の統一に重点をおく。人間の生ー歴史を善美にするために政治、経済、文化がある。基本的なものは生である。統一は各要因の相互作用にある。

六、弁証法の見地。(発展の弁証法) 肯定、否定、否定の否定。古い力と新しい力との争闘。止揚。飛躍。(発展の中断。) 新しい段階の生長。

七、生産力の見地。経済の発展にかんするかぎり生産力の見地は正しい。その発展や衰滅によつて経済いとなみが変化する。

八、経済法則の性格についてのマルクス。"経済法則とは社会的経済の鉄則である。即ち社会集団の固有或条件の下に於ては或種の行動をなさしめる鉄則である。" 経済法則即ち経済的経過の鉄則とは、人間の行動のその起る動機の強さが價格を以て測り得られる人間の行動に関する経済法則である。 経済学入門 三二頁

考へさせ、人性の葛藤が厂史や社会の根本的問題などという考察につれて行く。極悪囚人のなかに却て深い人間性の閃きをみることもあった。ドストエフスキーはシベリア流刑囚のなかにロシアの最良の要素をみたそうだが、私も小菅の囚人のなかに異常に意志強固なる者、異常に頭脳明敏なる者、異常に人情深い者を屡々発見して驚いた。文学的才能を豊に恵まれている囚人もいた。黙阿彌の描いた任俠、人情味、執拗、思ひきりよさ、単純な人

りは忽然として身辺から消滅した。灰色のコンクリートの壁、二畳の独房、鉄の格子、板敷きなど、いづれも陰惨、威嚇、硬直の感をもっている。

ここは七年以上の長期囚の来るところで、無期囚が二三百人をり、親殺しなどの尊属殺人も約十人集められている。敗徳者、詐欺漢、強盗、窃盗、人殺し、精神変質者、利己主義者、法螺吹き、あらゆる悪人の標本がいる。牢獄は深い謎のような人性の複雑について

五、経済学者の任務

一、真理の探究

二、社会問題の解決方針の提示(現代的関心 一)

三、政治家的な一定の見解の把握。経済の学理化としての要求の経済制の理解。(現代的関心 之)

四、経済主義への関心(現代的関心 [illegible])

1) [illegible]
[illegible]
2) [illegible]
3) 心
4) [illegible]

五、経済学説史

(1) フィジオクラット

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible] フィジオクラット

[illegible]

着せられ[illegible]坊主にされ、食事は朝夕一[illegible]菜一飯となつた。未決でまだ少しはかり残つていた世間とのつながりを[illegible]直す、これがその後の長い獄中生活の私の課題になつた。

[illegible]

の自然秩序の法則は古い自然法の法則となにらの関係がない。（初期の資本主義社会は古い自然法の観念にとびりつかれている。）つまりロック経済の代弁者であるフィジオクラートは、私有財産をみとめ、権利平等自然法はみとめるとみえる。然るに上の自由が諸個人の自由を生みだす。最後の結果は自由放任である。財産所有者、資本家、商人、にあらゆる契約の自由をあたへよ。個々人の利益は一般の利益と一致する。世界は自ら動く。そこには国家の干渉を必要としない。

自然にたいして加へた労働のみが生産的である。商業と工業とは不生産的である。生産物は価値の変形や結合にすぎない。社会は三つの階級——生産的階級（農業に従事する）、土地所有者（土地の所有者及び国家の代表者）及び不生産階級（商人、工業家、自由職業、僕婢）——から成る。

たものであることを後になって信ずることができるようになった。

当時の私に人格的謙虚の少なかったことを深く恥じる。自分の道徳的責任に心を痛めるよりも新しい業績を立てようとする政治的気分の時が多かった。他人を敬うことが少く、~~己に対する峻厳を欠く[illegible]かった[illegible]私は偽善を憎み自己[illegible]意欲の起[illegible][illegible]は行動[illegible]を[illegible]した[illegible]も強[illegible]~~自我を中心としてのことであった。人格を叩き

面があるに拘らず、他のお人好しを苛酷に取り扱ひ残酷に嘲笑した。私が共産党に居たとき悪魔に鼓舞される如くに積極的に行動したのはつまりはその根底に燃ゆるがごとき自愛の一念があったからだ。転向の際にもこうした自我欲念がはたらいていたであろう。後になって私はこのことを強く反省した。自愛が強ければそれだけ行動が積極的となるという一面がある。しかしそんな積極性からは善は生れない。自愛を捨てた行動が最も力に充ち

ことであつた。それにくらべると肉体的苦痛などは何でもなかつた。下方で残忍な反動政治にたいする憤怒が溢れたに燃えあがつたが、それよりも私が其後獄中で体験した深刻な精神的苦闘は私にとつて貴重な記憶である。自然、神・自己、人生、社会、国家、革命、民族・階級、社会主義、いろいろの根本問題が私に迫つた。私はなによりも自己にたいする戦ひを学んだ。その内的渦巻きのなかに或は喜び或は悲しみ獄中に歳月を経ること又

極左運動全体が壊滅する過程がはじまつた。有為な党員が続々党を去つた。私のある時の態度は今日よりかへりみて恥づべきことが多い。しかし根本的にこのいはゆる転向が正しかつたことを一度も疑つたことがない。

市谷の未決囚生活は五年近くになつていたが、昭和十年十二月から既決囚として小菅刑務所に入り、世間から全く隔絶せられた。政治への強い関心のなかに生きていた私にとつて、社会から全く眼をふさがれることは辛い

第一章　転向

一、真実を語る

私は昭和八年六月八日に親友鍋山貞親君と共に「共同被告に告ぐる書」といふ声明書を市谷の未決監から発表して共産党を脱し且つ今後は共産党及びコミンテルンの敵となることを宣言した。私たちは獄中にいても党の最も責任ある地位にあつたから、この声明は忽ちごうごうたる非難に包まれたが、結局これを動機として当時すでに社会性を失つていた

れば人に非ずといふ。思想的な思ひ上りがある。共産党員にあらざる者に対してはどんなトリックを用ひてもよい。私も共産党だつたときにそんなこともやつたが、その非人間的なやり方に深い嫌悪をもつようになつた。

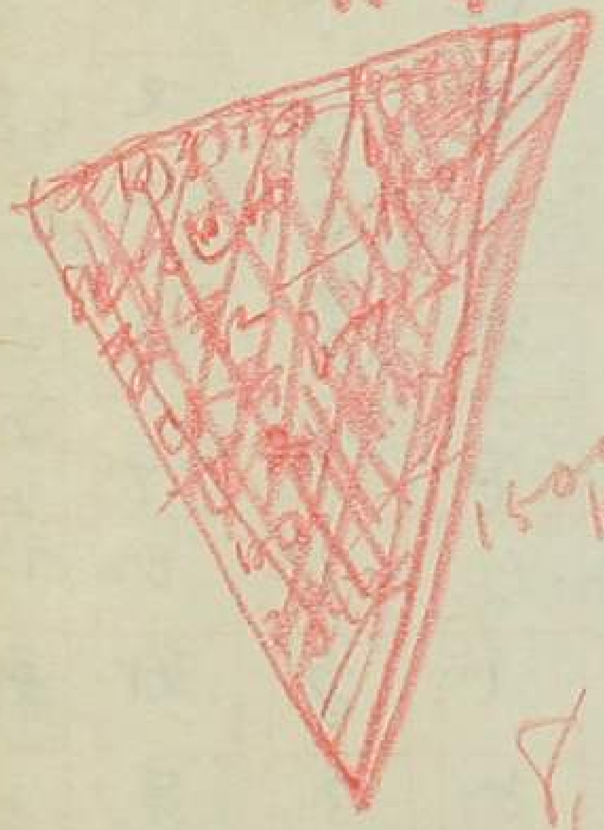
当時私は運動的には共産党をふりすて、理論的にはマルクス主義を超克して別に新しい理論を立つることを目的とした。昔から日本は理論の国でない。いつでも他国の理論を輸入して自己の思考の道具にする。日本の社会

いた。封建主義を倒すことを一つの任務とする党の中央部が封建的で、又党全体が封建的性格をもつことは致命的な自己矛盾である。今になってみると、ソ連共産党をはじめ、いなそれを手本として世界の共産党が党自らが独裁主義で固まり、レーニンが最も大切なものとした批判の自由が党員から奪はれてしまっている。自由といふことは近代文明の最も大事な獲得物なのだが、それを無視する。共産党は中世への復帰といふ反動性をもつ。自由を基礎にしない社会主義は一の変態的な全体主義となる。

第五、共産党の戦術における非人間的な謀略主義の害悪を悟ったことも脱党理由の一つである。目的のためには手段を問はざるマキアヴェリズムの現代における代表物は共産党で、ウソや中傷で人を傷け、大衆を欺瞞し、労働組合を踏み台にする。人を敵と味方に二分類することはヒットラーの政治哲学だったが、それが共産党にもある。共産党員にならざ

1) 経済建設
海運—漁業—貿易—商業資金
2) 島内治安—武装
3) 移民

西村	50,000
小倉	-20,000
森田	50,000
世界旅	10,000
稲富	25,000
田中	10,000



125,000
95,000

ることでない。階級主義の運動は利己心を挑発するから冷めたく陰惨なものとなる。利己主義で社会が明るくなるわけはない。

第四、共産党といふ党形態のなかではとうてい党内デモクラシーの発達の可能性のないことを悟つたのも私の離党理由である。ある時非合法状態であつたからとはいへ、党中央部が下部党員の意志を吸収せず、民主的集中主義の原則を無視して日本軍隊みたいな規律で党員を制約することは年と共に甚しくなつて

討プロレタリアートの階級対立を契機として成立したもので、この契機を無視するものは社会主義でない。しかし階級だけを至上絶対とすることは一史の事実を主観的希望で押しゆがめたもので、殊に民族といふ生きた力を勝手に除去するから、結局抽象的な観念論となる。社会主義革命は広汎な人民革命としてのみ成功するもので、勤労する農民や都市小ブルジョアを味方に引き入れるのには、プロレタリア独裁のごときも利己的思想を以てでき

タタミ	17,000
フスマ	5,600
ガラス	9,600
左官	5,400
水道	1,500
電気	~~3,500~~
	~~11,000~~
便器	2,000
	42,600

~~11,000~~

土地	110,000
家屋	310,000
アト	100,000
合	520,000

4800

~~13,000~~

消費組合

信用組合

信用組合

信用組合

15 5

消費

組合

する。だから世界革命ということは理想として各国の社会主義運動の内包せねばならぬことである。しかし現実の革命は一国々々の規模において、その民族のエネルギーの結晶としておこるものだ。そうでない革命などはシンコ細工みたいなもので、いつ崩解するか分らない。

第三、私は共産党の階級至上主義ないしプロレタリア独裁主義に満足しえなくなったから党を去った。近代の社会主義はブルジョア

会主義革命における新しい意義を発見したことも私を共産党から去らしめた理由である。労働大衆は深く自国を愛している。民族は人間にとって強い感情的基礎であるのみならず、政治経済上における現実の能動的要素であり、又国家はマルクス主義の教えるように単なる階級支配機関でなく、民族の社会生活の全体的調整者である。もとより世界には一体として進歩する基本的な流れがある。この世界史的な流れから孤立すれば、その民族は退化

早稻田大學圖書館

早稻田大學圖書館

八 水田印行